

ちえおくれの成人の発達に関する研究

西信高*・高橋憲二**・内田紀光**

Nobutaka NISHI, Kenji TAKAHASHI and Norimitsu UCHIDA

A Study on Development of Mentally Retarded Adults

Abstract The result of comparing between the numerical values of developmental age and abilities displayed in labor indicates that we should consider some peculiar factors in guaranteeing extensive development to mentally retarded adults. Those who have different numerical values often demonstrate similar abilities in understanding the meanings of working processes and the necessity of being on their own. It is really true that their development is not independent from conditions relating to them. Proper conditions for the mentally retarded are made or are not, that is the question.

But there are few studies on such problems and some of them insist that those who live in institutions are unhappy, that is, institutions do not contribute to their development.

This paper is the first trial for us to study from every side the characteristics of their development and above-mentioned conditions.

I 障害者施設と発達保障

1980年、ちえおくれの成人を対象とする福祉施設「仁万の里」が、隠岐島に建設された。手をつなぐ親の会を中心とする隠岐島住民の要求を背景とし、すでに設置されているちえおくれの児童施設「杉の子学園」の、ほぼ9年にわたる実践の発展として設立をみたものである¹⁾。

設立に至る過程で、隠岐支庁福祉部による島内在宅障害者実態調査が実施されている²⁾。その報告書は、

- ①終生生活ができるコロニー的機能
- ②授産の内容をもち、施設内で働くことにより、こづかい程度の賃金が得られるような施設
- ③施設から地域社会の職場へ通勤できるシステムをもった通勤寮的な施設
- ④医療保障が充実した施設
- ⑤障害者自身の発達を保障するための施設

以上5点を、今後設置されるべき施設の重要な機能として挙げた。全国の障害者施設の到達点をふまえ、隠岐島の独自の課題を織りこんで練りあげられた視点であ

る。仁万の里は、これらの相互連関を、「生活・労働・教育そして医療の里づくり」という表現に集約している。

この仁万の里の、隠岐島障害者福祉における位置と意義については、すでに若干の検討がおこなわれているが³⁾、これまで、ほぼ1年のとりくみをとおして、別の角度からアプローチをすすめる必要に迫られている。すなわち、生活・労働・教育それぞれの局面において、そしてまた相互の有機的結合について、従来の児童施設で蓄積されてきた成果を、成人施設で発展的に展開するうえで新たな視点の導入が求められてきているのである。

特に、成人施設の位置と役割に関する教育の面からの実践的検討は、未だ着手されていないといつてよい状況にある。例として、日本特殊教育学会第18回大会(1980)における発表をみると、「精神薄弱者」施設での教育をとりあげたものは、わずか2編にすぎない⁴⁾5)。このうち、河東田の場合、その属する施設で、津守式乳幼児発達検査を実施した結果として、「運動・探索・社会の各領域で、月齢の低下が、一般的にちえおくれの子どもにも獲得能力があるといわれている運動領域でも低下をみており、全体的には園生活で退行現象がはじまっていると思われる」とし、「施設という人間関係の乏しい(傍

* 島根大学教育学部障害児研究室

** 隠岐島町村組合立「仁万の里」

点筆者)、社会的刺激の少ない場から生き活きた互いに助けあえる子ども達のいる場、社会との関係がもて、社会の一員として気軽に参加・利用できる場」を外部に求めるべきことを結論している。

施設は、本質的・不可避免的にそのように限定されているのではない。

「運動会以前の行事は、全て職員の企画によるものであり、仲間は全く受け身の形で参加してきた。運動会の実行委員会は、行事への取りくみを主体的に行なおうという意図で職員の側から仲間へ提示され、週番の中から話し合いによる実行委員が選ばれた。そして実行委員会の中より委員長の選出が行なわれ、職員の実行委員会と並行して、仲間達自身の手により、組分け、競技種目等が出された。週番活動同様、これまでの受け身の生活からまだ抜け出せていない面があり、仲間の総括においても特に印象的ではなかったかもしれないが、一つの方法としての第一歩を踏み出したといえよう⁶⁾。」

そして仁万の里は、開設以来、「村民の方々より生活用品の寄贈をいただいたり、請負作業を提供いただいたり、また、なによりも里の仲間を地域の一員として迎え入れ、日常生活のいたるところで協力、援助をいただいていたことは、誠に感服のいたりです。里からは、地区運動会、スポーツ大会、広報誌の配布、奉仕作業を通じ、地域の中に入りこみ、とけこんでいく仲間もあらわれてきました。仲間たちが、地域住民の一員として、村の運動会、スポーツ大会、その他の行事に参加することは、意識の向上につながるだけでなく、人間としてのつながりを深めることになり、仲間の発達の上で大切なこと⁷⁾としてとりこんできている。施設そのものが、人間関係の乏しい退行現象のおきやすい場なのではない。職員集団の方向づけによって彼らの姿はかわるのである。その変容は、ちえおくれの成人一般の、独立・固有な法則のもとで生起するものではなく、彼らをとりまく諸要因との関係において規定されるものである。

この点は、非常に重要な視点と考えられるが、教育と発達の相互関係の問題として、児童の教育において論じられてきているところでもある。ソ連における教育の歴史を一瞥することは、以上の点を確認する意味で示唆的であるので若干ふれておきたい。

教育と発達との相互関係についての見解の変遷は、革命後のソ連の場合、1936年及び1956年が屈折点となる。前者は、いわゆる児童学批判であり、後者はその児童学批判の反動として拡大した教育至上主義の排除が標榜された年である。「ソビエト教育学」誌上を中心に展開された後者の論点は、教育が児童の人格発達において主導

的役割をはたすものであるが、しかし人格発達は教育その他の外的環境からのみ直接的に決定づけられるものではない。外的環境との間に生じる内的矛盾が発達の原動力となり、児童の自己運動として発達が実現されるといえるものである⁸⁾。教育は、その内的矛盾をいかに系統的にかつ組織的にひきおこすかの営みあるいは技術であって、内的矛盾は、心理発達において固有の内的法則をもつ児童の主体的な「自己運動」によって扯揚されるものであると理解される。

前記実態調査は、在宅者の半数がなんらかの疾病に侵され、年齢に比して老化現象が加速度的に進展していることを示した。しかし、これらの事実を、ちえおくれの成人に共通した特有の現象であると結論することは誤りである。貧困な諸条件での生活においてのみあらわれる、むしろ特殊ともいふべきであって、逆に一定の適切な条件のもとでは、いいかえれば適切にだてが講じられた環境のもとでは、まさに、「人間は生涯、死に至るまで発達していく⁹⁾」との展望をもつことも可能といえよう。

仁万の里におけるとりくみをとおして、われわれはそのことを確かめてきた。

「入所時の検査によれば、発達年齢が1才半にとどかない最重度といわれていたみさ子さんが、今回(10カ月後一筆者注)の検査では1才半の発達の壁を着実に克服していこうとしていることが判明しました。生活の中で、横への発達の拡がり、縦への発達につながり、障害の壁をつきやぶろうとしていることを現実に知らされた時、今年37才を迎える彼女の努力に対し強い尊敬の念を覚えるとともに、人間のすばらしさに感動させられました。又、今年57才になれる友作さんは、「せめて自分の名前を自分の手で書きたい」という要求をもたれ、ひらがなの勉強をはじめておられます。知恵おくれ者にとって、最も弱いとされる知的能力の発達に対し、自分の努力と仲間の支え、そして生活の保障と職員集団の援助の中で、豊かな人間としての歩みを進めていることを、この10カ月の仲間達の姿が示してくれています¹⁰⁾。」

このような発達の事実に学びながら、それらを保障する諸条件の科学的検討がわれわれの課題となっている。

生活年齢に比して低次の発達階層に位置するちえおくれの成人へのアプローチに際しては、「発達」の概念をはじめ、従来児童において得られてきた諸々の知見をふまえつつ、彼らに独自の側面の追求も要請されることとなろう。しかし、いずれにせよ、彼らを研究の対象としてではなく、また、管理する者とされる者との関係においてではなく、同じ地域住民として、「里づくり」に参

加する「仲間」としての視点を常に明確に堅持しつつ、仲間相互の関係の発達、施設の発達、そして「われわれ」の発達を実現していく方途を探りたいと考えるものである。

Cruickshank, W. M. 11)らは、障害者を障害者としてみているかぎり、障害が一層倍加・固定化される、もし社会 (society) によってハンディキャップ (社会的不利) がつくりだされるのであれば、逆に、それを社会が軽減していくことも可能なはずである、そのような観念に立つとき、研究の方法も変革されると主張している。三木¹²⁾に代表される「精神薄弱児教育の目標は、彼らを立派な精神薄弱者にすること、という理論を否定し、健全者と彼らとの共通項の究明を第一義とし、障害者観を一步前進させている。この考えに共鳴しつつ、さらに、「障害」を無原則的に捨象することなく、彼らが生活権をはじめとする諸権利の主体者であること、そして社会一般のあり方の追求におわるのではなく、全体的な人格発達を保障するとりでの役割をはたそうとする施設「仁万の里」を核として、社会を構造的にとらえたいと考えていることを付言しておきたい。

II 労働の局面における発達年令の意味

労働は仁万の里における活動の重要な環をなしている。

「労働を教授の基礎としてとりいれようという要求は、まったく別個の二つの根拠に立っているのであるが、その両者の結果は、相互に容易に合流するものである。第一の根拠は心理学であって、それは能動的に知覚されるものだけがほんとうに知覚されるものであるということ、われわれに教えている。子どもは動きたくてたまらないものであるのに、かれは動かない状態にとめおかれてきた。子どもは、知識が遊びまたは労働のたのしい能動的な形で自分に提供されるばあいには、それをきわめて楽に習得するものであり、その遊びと労働とはたくみに構成されると一致するものである。……現代の先進的な学校が労働を志向するいま一つの根源は、生活のなかで生徒たちにもっとも必要になるもの、現代の生活のなかで支配的な役割を演じているもの、つまり農業労働と工業労働とを、そのすべての多様性において、かれらに知らせたいという直接的な願望である¹³⁾。」
「われわれは労働を学習対象として、すなわち、すべての領域における技術の学習として、とりあげる。われわれは労働を教育の手段としてもとりあげる。なぜなら、われわれは、集団的労働によって始めて、人格がしっかりした立派なものとなるために必要な性格の全特徴を

育成していくことができることを知っているからである。われわれは、住民が従事している一般的な労働過程への青少年たちの参加としても、労働をとりあげる。労働は遊びごとではないこと、労働は社会を支える力能であることを、子どもは理解しなければならない¹⁴⁾。」

仁万の里全体の労働の展開、そして仲間個々人の具体的な課題等の設定にあたっては、さまざまな角度からの検討を要する。

ここでは、労働と発達との相互連関を明らかにする今後の作業のてがかりを得たいと考え、1年弱にわたって仲間がとりくんだ労働過程における姿と、発達検査によって得た発達年令との比較を試みる。

表1は、新版K式発達検査の結果である。なお、今回は統計的処理にもとづいた比較検討をめざすものではなく、実態の一端を把握することを目的としたため、仲間の一部のみをとりあげている。

次に、それぞれの仲間について、「里」創刊号に総括された「個人別反省」を掲げる(表2, 3)。

項目をたてて列挙してあるものは園芸班であり、列挙していないものは農林班である。項目の①は、どこまで作業できるか(作業能力)、②は、作業についての説明が理解できるか、③は、作業態度、仲間どうしのかかわり、④は、発達課題が、それぞれ記述されている。

表1とこれらとの比較の概略は次のようである。

園芸班において、発達年令に応じて、①は「やることが大ざっぱ」(4:1, M.M)から「なんでもできる」(7:7, K.K)まで発展的に推移している。一方、②では4:9 (I.M)で、「一生懸命にやり、いつも調子がよくのびのびしている」が、5:7 (F.M)、6:2 (T.S)で持続性や集中力が欠けるとされ、再び7:7 (K.K)では「職員がいてもいなくてもきちんとなつづく」とされる。また農林班において、自立意識の面で、真陰に考えない(4:2, S.T)が、4:11 (M.T)で自覚がたかまり、ほぼ2才近くの開きがあるにもかかわらず、6:7 (S.H)では「自立のための職業観が薄いのが一番の欠点」とされ、7:9 (K.F)でも「自立という考えはない感じである」とされる。

評価の視点や方法がこの時点では統一されていないため、単純な比較による推論は避けるべきではあるが、やはり、彼らの「発達は心理学的な「発達」概念でとらえられるものではない¹⁵⁾」であろうし、Davies, S. P (1959¹⁶⁾)のいうように、知能にとられるかぎり、文字どおりの仲間の育ちあいを求めることは不可能といえよう。しかしながら、DAの進展と対応する側面の存

表 2

M・M(女)	<p>① やることが大ざっぱ。 ② よくわかっている。 ③ 熱心だが興奮すると止めがきかない。 ④ 目の問題があるがもう少し、ていねいにできるように。</p>
S・T(女)	<p>野菜作り、薪運び、薪づくりの作業の中で、野菜作り、薪運びは好んでやり積極的だったが、薪づくりは針金の中にまきが入りまくらないこともあって、苦手の様であった。与えられた作業に関しては、理解出来れば責任をもち持続する。自立するという点に関しては、保護者に対する甘えがあり、真剣には考えていない様である。作業中のおしゃべりは多いが、誰とでもうまく関係をもちあう。</p>
T・K(男)	<p>① 細かい仕事は嫌い全身を使う仕事を好む。 ② よくわかっている。 ③ 朝礼時、作業中のトイレが目立つ。体力的に半日限度（猫車は好きだがまだ足腰がふらつく）やる気がある時はとても熱心にするが苦手な作業はなまける。 ④ トイレが作業や朝礼にさしつかえないように。苦手な作業も頑張るやれるように。</p>
I・M(男)	<p>① ノコヤカナヅチを使うことは好きだが細かい仕事を嫌う。葉ぼたんの鉢上げや土運びからだのことが心配。 ② あわてて誤解するところがある。自分で園芸の本を買って読んでいるが、花の名前と実物とが一致しない。 ③ 一生懸命にやりいつも調子がよくのびのびしている。 ④ 反省会、朝礼でのむだ話をつつしむ。細かい仕事も積極的にていねいに出来る様に。</p>
M・T(男)	<p>主な作業として、開墾、下ふぎ、左官の手伝い（1週間くらい）を行なった。自立する為には、働かなければならないという事が解っていて、真剣に取り組み、与えられた作業は、責任を持って遂行しており、確実性も高い。（自分の出来ない作業については 言いききて、自分の出来る作業を行なっている。）その為、持続性もあり、下ふぎは、難しい作業ではあったが熱心に出来た。また、作業内容が解れば、自分の使う必要な道具は持って行き、終われば後片付けもする。自分だけでやってしまおうとするところの協調性に欠ける。 ※課題 少し作業に対して消極的なところがあるので、もっと大きな声で発言し、積極的に取り組んでゆき、もっとしっかりとした自覚で、自立を考えて欲しい。また、誰とでもやっていける様な協調性を養ってゆきたい。</p>
M・Y(男)	<p>薪作りの作業の中で、のこを使い、木切り作業を長期行なったが、好きな作業らしく根気よく出来た。以前よりは、作業意欲が出てきてはいるが、時々、体の不調を理由に作業を休んだりする甘えが残る。 ※課題 作業に対しての甘えが少なくなる様、しっかりした職業観を持たせたい。また、集団の中に溶けこめない面があるので、出来るだけ複数の中で作業にあたらせ、協調性も深めたい。</p>
A・J(女)	<p>自立するには働かなければならないという職業観はあるが、保護者に対する甘えもあり真剣に考えていない様である。畑うち、うねづくり等野菜に関する作業を行なった。10月頃から作業に対する意欲が見られ、与えられた作業に関しては、積極的に取り組む姿勢が見られた。作業内容を理解出来れば、準備から後始末まで確実に持続する。 ※課題 自立する事を真剣に考えさせ、与えられた仕事に対して意欲的に取り組ませる。重度者に対しても積極的に、グループのリーダーとして指導していける様にする。</p>
F・E(男)	<p>草、木の名前を良く知っており、特に山仕事を好んでし、木の伐採等の好きな 作業では持続性がみられた。職業観に於いては、話してやれば習慣的な事に限らず意欲は見せるが、将来の自立への切実感はなく作業にもムラがある。また、自己主張が強く協調性に欠け、1人で作業をする場面が多い。 ※課題 本人中心的な考えに柔軟性を持たせ、総合的な判断のもとに、作業に取り組ませる。</p>
T・K(男)	<p>① 小屋作りとかノコ、カナヅチを使う仕事は好む。 ② あわてて誤解するところがある。花の名前はよく知っている。 ③ 好奇心がつよく他の人のことが気になり、指示も命令調であり言葉使いも悪い。一生懸命するが、作業中のむだ話が多い。 ④ 作業中のむだ話をなくし細かい仕事も根気よく出来るようにまた重度の人にも思いやりの気持をもってリーダーになれるように。</p>

表3

Y・Y(女)	<p>① 土はこび、草とり。 ② よくわかっている。 ③ まわりがとても気になる。働くというより機能訓練と思っている。他の人が怒ると自傷行為が見られる ④ もっと身を入れてできる様そして自信を持たせる。</p>
A・H(女)	<p>将来の自立への切実感はない。 鋸打ち、野菜作り、薪作りなど与えられた作業に関しては、準備から後始末まで責任を持ち持続する。こちらも安心して任せられる。又、下ふぎ作業も蜂にさされたりしながらも、女性ただ一人ではあったが積極的に参加した。 どちらかといえば孤立した感じで、自分が好む仲間としか関係をもちあわない。 ※課題 自立するということの必要性をわからせる。型通りでひろがりができにくい、自己をはっきりもちながらも誰とでも関係をもちあっている様に、又、職員の指導方法も課題の1つである。</p>
F・M(女)	<p>① 草取り。 ② よくわかっている。花の名前、育て方も知っている。(杉の子学園で経験している) ③ 嫌いな仕事はせず職員の目を気にする。前期に比べて後期は態度もやわらかくなり他の人に対してもしじめることがなくなってきた。 ④ 責任を持たせリーダーになれるように。もっと勉強して他の人にも教えてほしい。</p>
F・K(男)	<p>施設内での作業に於いては、積極性に欠ける。自立する為には、働かなければならないという職業観はあるが、全ての事を、お金に結びつける考えが先行し、現在の作業に対しては、真剣に取り組まず持続しない。途中、左官の作業を希望し他の仲間1名と一緒に仕事に出たが、こちらでは頑張っている様子である。作業としては、ねこ車押しなど単純作業を好み、少し込み入った作業や初めての作業に対しては、応用がきかず他の人に頼りがちである。</p>
T・S(男)	<p>① 土はこび、土ふるいは得意。 ② よくわかっているし、花の名前も知っている。 ③ 他の人のことが気になってしかたがない。持続性がなく場所を離れることがよくある。自分のミスに気がつかない。 ④ むだ話をなくし作業に熱中すること。仲間と協力して作業ができる様に。</p>
S・H(女)	<p>入所時には、性格も明るく、作業にも懸命に取り組んできたが、夏頃より、作業意欲が見られなくなりふさぎこむ場面が多くなった。 自立の為の職業観が薄いのが一番の欠点であるが、食事を規則正しく取らないなどの生活のみだれから、体力が落ちてきたことも作業意欲をなくしている様に思える。 ※課題 しっかりとした職業観を持たせる事が、一番の課題である。 また、適した作業を見つけてやり、積極的に取り組む中で、何らかの自信をつけさせることも必要だろう。</p>
K・K(女)	<p>① なんでも出来て特に苔まき等の細かい仕事は上手にできる。健康に気をつけるべき。 ② よくわかっている。 ③ 職員がいてもいなくてもきちんとつづく。 ④ 細かい手先の仕事を中心に出来るように。リーダーになれるようにし他の人にも教えてあげられるようになってほしい。作業を通しての健康づくりを考える。</p>
K・F(女)	<p>主に、野菜作りの作業を行ってきた。以前、経験もあるらしく作業も上手で、好きな仕事の1つの様である。決して無理することなく、自分に与えられた作業を地道にこなしていく。生活していく為には、働くことが大切だということは解っていると思えるが、自立という考えはない感じである。 ※課題 与えられた作業をこなすだけでなく、積極的に作業に取り組める様、生涯的に楽しめる内容を、考えていきたい。</p>
M・S(男)	<p>主な作業として、下ふぎ、開墾、薪作りなどを中心に行なった。自立する為には、真剣に取り組んでおり、与えられた作業は、責任を持ち確実に遂行している。また、今迄の経験・知識により、職員以上の能率をあげている。しかし、協調性に欠ける面があり、職員の言う事については納得するが、仲間との会話はあまりなく、時として、いざこざをまねく。そういうことから、職員が1つの作業をまかせても、仲間へ指導してゆけないのが残念である。また、道具等も作業内容が解れば、自分で準備するが時として、多くの道具を持ち過ぎて、他の仲間が必要としている場合でも、貸さない事がある。 ※課題 与えられた作業だけをやるのではなく、指示がなくても自分で計画してやっていける様になって欲しい。 また、指導していく力は十分にあると思うので、もう少し協力し合い、接し方を考えて、班の中心人物となり職員がいなくても、仲間をまとめ、1日の作業が出来る様に努力して欲しい。</p>

在も否定できないのであって、人間に固有の心理学的特性を正しく反映させるべきことも同時に指摘しなければならない。

仁万の里が開設されて、仲間として迎え入れられるまでの数年間あるいは数十年間、彼らの多くが「健康で文化的な最低限度の生活、を十分には保障されてこなかった」のであり、また、そのことと直接間接にかかわって、単にちえおくれにとどまらない副次的障害を受けてきている。さきの評価や発達年齢は、当然それらをひきずったものである。彼らの生活史を全面的に受けとめつつ、仲間集団と職員集団との発達要求の織りあわせのなかで、あらたに主権者としての民主的人格の形成、すなわち発達を保障するみちすじの解明が求められている¹⁷⁾。

われわれの研究は、その一環として位置づけられるものであるが、ちえおくれの成人の発達についての一つの問題提起にとどめて、本稿をおわる。なお、文責は西にある。

注および参考文献

- 1) 西 信高, 吉田正二, 高橋憲二; 隠岐における障害者福祉Ⅳ, 山陰文化研究紀要 No.20, p.p. 71-75, 1980
- 2) 同上書, p.p. 63-71
- 3) 同上書及び,
西 信高, 吉田正二, 高橋憲二; 隠岐における障害者福祉Ⅴ, 山陰文化研究紀要No.21, 1981
- 4) 河東田博; 重度精神薄弱児施設における教育と生活について(2), 日本特殊教育学会第18回大会論文集, p.p. 122-123, 1980
- 5) 北沢清司; 精神薄弱者施設指導法の検討 2, 日本特殊教育学会第18回大会論文集, p.p. 96-97, 1980
- 6) 仁万の里年報「里」創刊号, p. 24, 1981
- 7) 同上書, p.p. 5-6
- 8) 代表的な論文として,
ゲ・エス・コスチューク; 子どもの教育と発達との相互関係について (1956). 邦訳は, 柴田義松他; 資料ソビエト教育学, 新読書社, p.p. 212-235, 1976
- 9) 仁万の里年報「里」創刊号, p. 3, 1981
- 10) 同上書 p.p. 4-5
- 11) Cruickshank, W. M.; Psychology of exceptional children and youth (3rd Ed.), Prentice-Hall, p. 110, 1971
- 12) 三木安正; 私の精神 薄弱者 教育論, 日本文化科学社, p.p. 140-141, 1976
- 13) ルナチャルスキー, 矢川徳光訳; 労働教育論, 明治図書, p. 39, 1960
- 14) 同上書, p.p. 23-24
- 15) 大泉 博; 障害者の生活と教育, 民衆社, p. 282, 1981
- 16) Davies, S. P.; The mentally retarded in Society, Columbia Univ. Press, p.p. 232-233, 1959
- 17) 「すなわち」と結びつけるためにはなお検討を要するが、ここでは一応このようにとらえておく。
(1981.9.10)